

「お金」は大切にしなければなりません。

僕が俳優の道を歩きはじめたのは、十七歳の時です。六本木にある劇団俳優座の俳優養成所の試験に合格して三年間通いました。

僕の家は、当たり前のように、貧乏だったので、アルバイトは何でもやりました。新聞配達、納豆売り、そのころからおしゃべりが得意だったので、才能を生かしたアルバイトで、収入を増やしたいと思い、友達に誘われて、悪いアルバイトもしました。

その当時、やっと世の中が、落ち着いてきて、誂えの服を作りたいと思う大人が増えています。そのアルバイトは、洋服生地の販売です。まず、その商売の元締めのところへ案内されました。怖いおじさんが「この商売は、ちょっと危険だよ。でもそのかわり一生懸命やれば、かなりの金稼げよ。紳士服の生地を持ってお金持ちの家を訪ねて、うまくやれ」とのことでした。部屋の押し入れを開けると紳士服の生地を一着分ずつたんだものがたくさん積んでありました。いろいろなカラーと柄の違う洋服の生地です。怖い男はその一つをだして授業を始めました。「この生地はよく織られていて、まず、この端から糸を一本抜くんだ。それをこのライターで燃やし、指で消してお客さんに嗅いでもらおう。ホラ、お前も嗅いでごらん、純毛が燃えた匂いがするだろう。これが決め手だ。ただし、これよりさきの生地から糸を引っこ抜いちゃだめだ。燃やしても純毛の匂いはしない、だって純毛じゃないからな。まぢがってもこの辺から先は燃やすなよ」。その生地端にはオールウールとありました。



絵・江口修平

「お金」は、大事なものです

愛川欽也

そして、実習がありました。「お前うまいぞ。あとは値段だ。これが本物ならデパートや洋服屋で買えば、一着安くても二万円はする。ところが、これをお前がいくらで売ろうが五千円だけを俺に払えばおわり。じゃ、三つぐらいもって先輩と一緒に帰って来い。「町を選ばなきゃ売れっこない。お前どこがいいと思う?」と、先輩。僕は小田急線の成城学園を指差しました。先輩は「いいぞ」。

あるお屋敷の門で呼び鈴を押しました。玄関が開いて品の良い奥さんが現れました。「あのうご主人用の洋服の生地の訪問販売です。実は、僕は洋服屋に勤めていたんですが、倒産して、給料の代わりにこの生地を貰ったんです。僕には高級すぎて自分では着れません。一着買えば三万円くらいです。一万円でもいいでしょうか。旦那さんのプレゼントにしたら喜ばれますよ」。ここまででは得意の言葉がすらすら出てきました。「ちょっとおまちください」。もしかすると交番にでも電話されたら大変なことになる、どうしようと思っていたら、奥さんが現れました。「ごめんなさいね。主人は先月亡くなりました。あなたは偉いわね。きつと他の洋服屋さんで雇ってもらえますよ」と言っつて、僕に千円札をくれました。「ありがとうございます」と、僕は小さな声で言い、頭を下げて外へ出ました。「僕にはこの仕事は無理です。親方よろしく」と、先輩にも頭を下げて別れました。

ポケットの中には暖かい千円札がありました。「お金」は大事なものです。

あいかわ・きんや●1934年、東京都生まれ。俳優座養成所を経て、テレビ草創期より俳優、声優として活躍。軽妙なトークと温かい人柄で『11 PM』『なるほど!ザ・ワールド』『出沒!アド街ック天国』などの番組で司会者としても活躍。劇団キンキン塾の旗揚げ、キンケロ・シアターの設立など、精力的に活動。2012年4月にインターネット放送局[kinkin.tv]を設立し、『愛川欽也バックインニュース』や、監督作品などを放送している。http://kinkin.tv/まで。

